

佐賀県研究成果情報

カンキツ品種「天草」の早期摘果による果実の肥大促進					
[要約] 無加温ハウスで栽培された「天草」は、 <u>6月上旬</u> に葉果比を 120 程度に <u>早期摘果</u> することで果実肥大が優れる。					
果樹試験場・常緑果樹研究室			連絡先		0952-73-2275
部会名	果樹	専門	栽培	対象	その他のカンキツ

[背景・ねらい]

ハウス栽培された「天草」等の中晩生カンキツ品種は、商品性の向上を図るために、大玉果の生産が必要である。そのため、「天草」の果実肥大特性を把握し、適正な葉果比や摘果時期について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 葉果比 120 区は 90 区、50 区に比べ摘果直後の夏期の日肥大量が大きく、秋期には葉果比 50 区の日肥大量が特に小さくなる(図 1)。
2. 6 月下旬の果実横径が大きい程、収穫時の果実横径も大きくなる傾向にある(図 2)。
3. 摘果時期の早晩にかかわらず、葉果比の大きい方が果実横径は大きくなる。ただし、6 月上旬の早期摘果は、葉果比に関係なく 6 月下旬の摘果より肥大促進効果は大きい(図 3)。
4. 収穫時の果実品質は、早期摘果区でやや果皮色は薄いですが、果実肥大が良好であることからクエン酸は低くなる。しかし、糖度への大きな影響はほとんど見られない(表 1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「天草」の無加温ハウス栽培に活用できる。
2. 気象条件等により生理落果が遅くまで続く場合には、落果終了後に摘果を行う。
3. 果実品質の低下を招く恐れがあるため、葉果比 120 以上の過度の摘果は行わず、摘果不足の場合には仕上げ摘果も実施する。

[具体的データ]

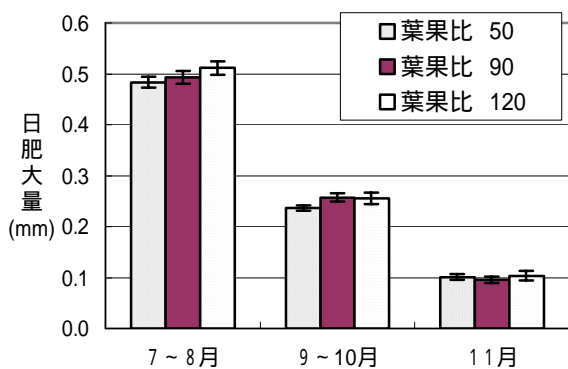


図1 時期毎の葉果比別日肥大量 (2000年)

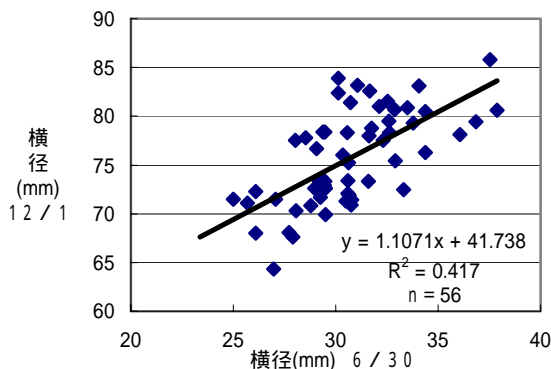


図2 6月下旬の果実横径と収穫時における横径との相関 (2000年)

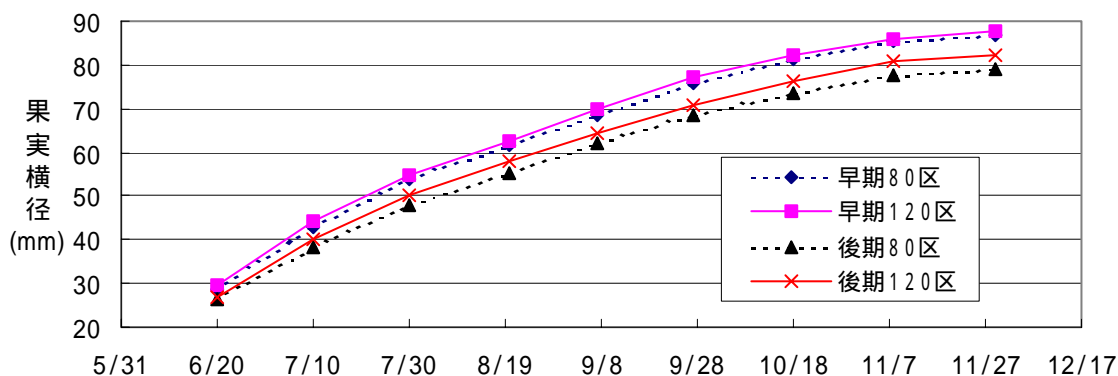


図3 摘果時期及び葉果比の違いによる果実横径の推移 (2001年)

注) 摘果時期は早期摘果で6/5、後期摘果で6/20

表1 摘果時期及び葉果比の違いが収穫時の果実品質に及ぼす影響 (2001.11.29)

処理区	横径 (mm)	果実重 (g)	果肉歩合 (%)	果実比重	糖度 (Brix)	クエン酸 (%)
早期 80区	85.9b	304.4a	84.5a	0.98a	9.9bc	0.95b
早期 120区	88.7a	327.2a	83.7a	0.96b	9.9bc	0.95b
後期 80区	79.2c	240.9c	83.0b	0.96b	10.3a	1.05a
後期 120区	81.3c	265.7b	83.8ab	0.98a	10.0ab	1.02a
有意性 (t検定)	*	*	*	*	*	*

注) *は5%水準で有意差あり

[その他]

研究課題名：新中晩生カンキツの施設利用による高品質安定生産技術の開発

予算区分：助成試験 (新技術地域実用化)

研究期間：平成11～15年度

研究担当者：平野稔邦・池田繁成・新堂高広

発表論文等：平成13年度常緑果樹試験研究成績概要集